勿凝学問 173

2008 年 9 月、いま政界で何がおこっているのか？
衆参二院制否定論者たちによる二院制問題点の最大活用

2008 年 9 月 6 日

慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

2008 年 9 月 1 日夜 7 時の NHK ニュースでは、民主党の小沢代表が三選を目指して代表選挙に正式に立候補することを正式表明したニュースがトップで、約 5 分間放送される。

2 時間半後の 9 時半から福田首相の辞任会見が行われる。それ以降、テレビは首相辞任と自民党総裁選ニュース一色に染まる――お見事でした（笑)。

民主党には、これまで掲げてきたマニフェストを軸にまじめに議論をすればボロがでるというお家の事情があるため、代表選で対立候補を出して政策論議などできるはずもなく、なかなか辛いところである。総裁選後の総選挙で、万が一自民党が勝って直近の民意の支持を得ることができれば、最大の功労者は福田さんだと僕は思う。だから僕は、辞任表明から 2 日経った 3 日に官邸会議室を出る際に首相に挨拶をしたとき、心から「お疲れ様でした」と言った。

さて、来週中に、10 年後の年金を占う原稿を書かなければならない。最近は、僕が断れば、どこぞの思いこみ君たち――彼らの多くは制度も歴史も何も知らないままに、流行りの年金論を我先にと論じていた若い頃の初動の謬りとの整合性に引きずられている――にその仕事がまわり、頭の痛くなる文章を書かれては面倒だから引き受けるという消極的理由で仕事をしていることが多い。と言っても、10 年後の年金を占う原稿がそうなのかどうかは、秘密である。。。

ところで年金などというものは政治過程の産物にすぎない。だから、年金の将来を占うには、必然、政治の有り様を占わなければならなくなる。しかし、そうしたことを書くような雑誌ではなさそうだし、文字数の制限も厳しいので、今後の政治の有り様を占うベースとなる「2009 年 9 月、いま政界で何が起こっているのか？」でも、頭の整理のために、ここにまとめておこうと思う。

今日の政界の有り様の根源的な原因は、憲法が抱える欠陥にあると考えている。この国では、第一院とさほど違わない権力をもつ第二院をもつ衆参二院制の政体をとっている。そうした衆参二院制がもつ問題点は、民主党党首小沢氏も幹事長鳩山氏も強く認識しており、ふたりとも実質的な一院制を唱える改憲論を過去に展開してきた。彼らの改憲論を紹

介した文章に、「勿凝学問 101　参議院を制した二院制否定論者たち――民主党代表と民主党幹事長の参院大改革論のご紹介」がある。この文章の冒頭は、次ではじまる。

> まずは、参議院憲法調査会でしばしば言われ、鳩山民主党幹事長も引用されていたらしい、フランス革命期の理論的指導者シェイエスの言葉をどうぞ。
>
> 第二院は何の役に立つのか、
> もしそれが第一院に一致するならば、無用であり、
> もしそれに反対するならば、有害である

今の憲法には制度的欠陥がある。憲法というハード面での欠陥は、そのルールのもとでゲームをする人間、特に政治家というソフト面でカバーするのが常識的対応である。その動きが、昨年末の党首会談による連立への動きであった。しかしその試みは、政局がらみの視点からみれば非常識と判断され、いつもながら大局的な視野とは無縁の民主党議員によって破談になる。その後、小沢氏代表辞任表明・引き留め騒動を経て、現憲法の欠陥を知り尽くし改憲論まで発表していた小沢氏と鳩山氏たちの手で、衆参二院制を定めた憲法の欠陥が最大限に利用される展開となる。

12 月に民主党との協議を諦めきれなかった福田首相は、社会保障国民会議を立ち上げて、一緒に議論をしようと呼びかける。しかしながら、民主党は全面対決姿勢を決め込む。もしあの時、民主党が国民会議に参加する途を選択していれば、いや、あれほどの対決姿勢を示していなければ、官邸は、与党推薦であったらしい僕を、与党推薦といえどもあの会議のメンバーに選ぶことを拒んだことは容易に想像がつく。僕は民主党の年金戦略を、実物通り、等身大に評価して、「彼らは年金を政争の具にしているだけであり、年金を政争の具にするここ数年の民主党の政治戦略こそが諸悪の根源であり、この戦略ゆえに日本の政治は医療問題や税制改革など喫緊の課題への解決策をこれまで示すことができなかったのである」という論を展開していたからである（2007 年 10 月に第 115 回社会政策学会で基調報告をした「年金騒動の政治経済学――政争の具としての年金論争トピックと真の改善を待つ年金問題点との乖離」参照）。

さて今後の政治――どうなるのか分かりようもない。僕が研究者として物心ついたときから言い続けているのは、「政策は、所詮、力が作るのであって、正しさが作るのではない」という言葉である。憲法の欠陥がそのまま映しだされた歪んだ力の赴くままに、年金はおかしな方向に進んでいくのか。それとも、国民が一定の見識を示して、年金を政争の具から解放する力が新しく生まれてくるのか。

「10 年後の年金」――出だしと結論は、次のようになっている。はたして、締め切りま

でに変わるのか変わらないのか、自分でもよく分からない。

去年の手帳をみてみると、8 月 29 日に映画「シッコ」を観に出かけている。アメリカの医療事情をとりあげたこの映画のおもしろさは、国民の 6 分の1を占める無保険者の悲惨さを対象とした映画ではなく、普通に民間医療保険に加入している 6 分の 5 の国民の医療にまつわる不幸を描写しているところにある。本稿は年金の話だが、この映画の趣向を少しマネして、公的年金に参加していない未納者というよりも、ちゃんと保険料を払っている9割を優に超える国民の話をしてみようと思う。

・・・

・・・

・・・

10 年後の年金がどうなるか。それは、この国の民主主義の下で年金が政争の具として弄ばれる度合いに依存するであろう。年金に限らず、この国は、いろいろな面で、かなりおかしく危なくなり、国民は自分で自分の首を絞める途を選択していることを感じている専門家は、相当いるのではなかろうか。それもまた、国民の選択と言えば選択であり、国民の目線に立つ政治と言えば、間違いなくその通りではある。

なお、わたくしの政治的立場というものを、講演でしばしば使うスライドをもって示しておく。

まずは、自己紹介

- あるメディア界の友よりのメール
  Wed, 8 Aug 2007 18:13:55 +0900
- 参院選の前に、民主党の議員に「権丈先生って、民主党の年金改革案を痛烈に否定して、与党の年金論を擁護をしてるけど、どんな先生なの？」と聞かれましたので、
- 私は「権丈先生は返す刀で与党の医療政策をこっぴどく批判してますよ。そういうことは、一連の著作をよく読んでから言った方がいいですよ」と言っておきました。
- 上述の会話は、複数のメディア界の友がしている模様・・・

主体的に浮動票を演じる
——それでいいではないか

- 映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」の一コマ
- 出演
  - 不真面目な海賊　キャプテン・ジャック・スパロウ
  - ヒロイン　エリザベス
  - ヒーロー　ウィル
- エリザベス　「ジャックはどっちについてるの？」
  ウィル　「今は、こっちの味方みたいだ」

Keio University
Y Kenjoh

主体的浮動層（票）の出所とともに、もうひとつ。

「勿凝学問 46　歳出削減はいつまでつづくのか？——この国には新自由主義とか市場原理主義の政治家などいない」〔Ⅳ巻 297-8 頁〕より

「主体的浮動層」とキャプテン ジャック・スパロウ

先日、かつて中央公論の編集長をつとめた粕谷一希氏の『作家が死ぬと時代が変わる——戦後日本と雑誌ジャーナリズム』を読んでいたら、「主体的浮動層」という言葉をみつけた。
私は「反体制」にも反対だが、「助言者」にも限度があると思っている。 永井陽之助さんが言っていた「主体的浮動層」というポジションが一番いい。浮動票という言葉があるが、インテリの役割というのは主体的な浮動層だと永井（陽之助）さんは言っていた。あるときは、最大の政治権力に対する批判者となり、あるときは統治者と協力して一つの政策を実現する。こういう立場を「主体的浮動層」と名づけたのである。私はジャーナリズムも、本来は主体的浮動層でなければならないと思っている。

粕谷(2006), p.271.

「主体的浮動層」——実にうまい表現である。同じ事を言うにも、わたくしがこれまで何度か使ってきたジャック・スパロウとは、品格が違いすぎる（涙）。